

北宋『復古編』の元代の増補2種の文字集合の違いについて

鈴木俊哉[†]

概要: 北宋中期に張有が編んだ『復古編』は1240字程度の小規模な篆書の字様書だが、元代に様々な派生の字様書を生んだことが知られる。その大半は失伝し、現在では『増修復古編』『續復古編』の2つが残る。一般には四庫全書提要での評価を引いて『増修復古編』は注文の形式を張有のそれから改め、追加した情報にも誤りも多く混乱しているのに対し、『續復古編』は張有の形式を守り増補版として妥当なものと評価される。しかし、両書の小篆見出し字についてデータベース化を行ったところ、『續復古編』が『復古編』から受け継いでいるもののほうが少なく、増補版とは言い難いことが判った。

キーワード: 復古編、續復古編、増修復古編、説文解字。

Comparing the Character Sets of the 2 Extended Versions of "Fu Gu Bian" in the Late Yuan Dynasty

suzuki toshiya[†]

Abstract: The "Fugubian" (FGB) compiled in the Northern Sung dynasty was a small tutorial for glyph shaping for Seal script, by 1240 heading glyphs. Many derivative studies were produced in the Yuan dynasty. Most of them were lost, but 2 works, Zhengxiu Fugubian (ZX-FGB) and Xu Fugubian (Xu-FGB) are remained. Most prior studies criticized ZX-FGB is buggy, and Xu-FGB is better and appropriate to deal as the extended version of FGB. But comparing the character sets of their heading glyphs, it was found that the overlap between Xu-FGB and FGB is quite smaller than that between ZX-FGB and FGB.

Keywords: Fugubian, Xu Fugubian, Zhengxiu Fugubian, Shuowen Jiezi.

1. はじめに

宋元代の文字学は、北宋初期に勅命によって説文解字の校訂(徐鉉による、いわゆる大徐本)が行われたことが大きな起点となる。勅命による大徐本は楷書の字書である集韻・類篇にも大きな影響を与えているけれども、北宋期の版本は伝わらず、現存する版本は南宋期まで降る。大徐本の北宋版本が伝わらないのはそもそも宋元版で現存する文献が少ないせいもあるが、北宋期の文字学は常に大徐本を基盤としていたわけではなく、北宋中期に王安石による『字説』が流行していたことも一つの要因であるかもしれない(陳2019, 陳2021)。

『字説』は佚書となったが、漢字字形について必ずしも説文による六書分類に従わず、独自の解釈を与えていたことが知られる(大半を会意で解釈する傾向があったと言われる¹)。王安石は北宋神宗期にいわゆる新法改革を行い、その過程で『字説』が科挙の材料に組み込まれたため、一般社会における文字学に対しても影響があったと考えられる。この文字学の変化に対して、従来の説文に基づく文字学の立場から編まれたのが張有の『復古編』である。

本稿では文献名を初出時のみ『』で括り、それ以降では混乱が生じない限り簡易のため括弧に表記する。また、固有名詞はJIS X 0208で表記可能とするため部分的に新字

体に改めるが、それ以外(たとえば小篆の見出し字を指示するための漢字など)はISO/IEC 1064のCJK 統合漢字拡張Fまでの範囲の漢字を用いる。

2. 復古編と派生文献

2.1. 復古編について

復古編は1230字あまりの小篆を韻書の構造で並べた字様書である²。意符・声符の分解は基本的に説文に基づく。大徐本の見出し小篆は11100字の規模で、復古編はその1割程度のサイズであるから、説文そのものを代用することはできない。しかし、附録の聯縣字、形聲相類、形相類、聲相類、筆迹小異、上正下譌などにより、混同し易い字形、書き誤りやすい字形などを説文よりも容易に確認でき³、唐代楷書における『干祿字書』のような利用が可能である。元初の篆刻家・金石学者であった吾丘衍による『學古編』は小篆を学ぶための資料5種⁴の中に、大徐本・小徐本に並んで復古編を挙げる。

文字学資料として興味深いもう一つの点は、復古編はおそらく大徐本「だけ」を規範としていないことがある。唐代の李陽冰刊訂説文が改めた箇所を大半を大徐本・小徐本はそれ以前の状態で復旧したと考えられているが(福田2003)、復古編の序文では李陽冰の筆法を称揚しており、また、本文中の小篆字形が大徐本字形と合致しない場合や、

¹ 邱2011、王2020、陳2021の他、『字説』については黄2001が先行研究をよく整理している。

² 邱2011では『廣韻』の排列としているが、同時に説解の中では『集韻』から採られたものがあると言う。

³ 説文の文字排列は部首分類ではあるが、類字がまとまって並ぶルールではないので、微細な字形差が別字への混同を招くか、また共通の図形部品

の字形差がどの程度許されるかを判断するのに容易でない。さらに大徐本は誤字を示さない制限もある。

⁴ 『許慎説文解字』15巻、『蒼頡』15篇、『徐鉉説文解字繫傳』40巻(いわゆる小徐本)、『張有復古論』2巻、『五聲韻譜』5巻を挙げる。蒼頡15編、五聲韻譜5巻は、巻数から判断して秦漢代の小學書『蒼頡篇』や、南宋の李燾による『説文解字五音韻譜』とは別のものと思われる。

さらに甚だしくは大徐本字形を附録の上正下譌で譌とする場合すらある(図1, 図2)。李陽冰の小篆を残す資料は少ないので、復古編からも得られるとすれば貴重である⁵。



図1: 復古編(影宋写本)の附録「上正下譌」「筆迹小異」
上正下譌(左から乏、走、天)は上が正しく下が誤りとする。筆迹小異(左から爲、能、長)は上下の位置づけに関する説明は無い。

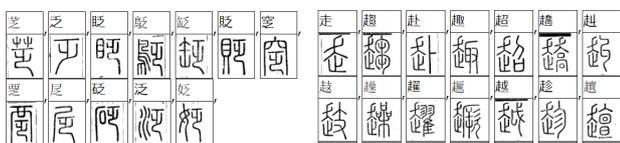


図2: 大徐本(淮南書局本)での図形部品「乏」を含む小篆群(左)と、「走」を含む小篆群(右)
復古編では誤りとされる字形のほうが優勢である。



図3: 復古編の影宋写本(左)と元刊本(右)

元刊本の小篆は円弧を少なくし、重心が高くなるようにデザインしている。影宋写本は「夆」の字形が不統一であることに注意。

復古編は北宋期に成立し、南宋期に少なくとも2種印行があったと考えられる(邱 2011、王 2020)⁶。しかし宋刊本は現存せず、現存するのは元代の好古齋本(至正丙戌秋九月の年記があり、1346年である。中華再造善本にて影印出版さ

れた)と、明末清初以降と思われる影宋写本(黄丕烈旧蔵、四部叢刊三編にて影印出版された)、またそれらの写本である。元刊本は影宋写本に比べて説文学的誤りは少ないが(詳細は後述)、元刊本の小篆字形は図3に示すように美的観点からの調整が加えられている印象があり、宋本が影宋写本よりもこの字形に近かったとはやや考えづらい⁷。

2.2. 復古編の派生文献

復古編は元代にはかなり広く行われたらしく、少なくとも6種の校訂・増補本があったことが知られる。その多くは失伝したが、元後期の呉均『増修復古編』と曹人『續復古編』の2つが現在に残る⁸。両書とも編者の事跡は明らかでない。

増修復古編は上下巻から成っていたと思われるが、現在は明刊本の上巻のみ伝わる⁹。その序文に引かれる文献名¹⁰から考えて成立は元末明初、おそらく現存の明刊本が最初の印行と思われる。この明刊本では冒頭に「吳興張有謙中編輯/後學吳均仲平増補」としており、根本的な書き直しではなく増補版と位置付けていたと推測される。

續復古編には多くの序文が寄せられており、その年記から元後期の至正年間(1351-1368)に成立したことが分かる。ただし、元・明代の印行は知られておらず、現存する最古の資料は明・趙宦光旧蔵写本と、清・陸心源旧蔵の影元写本とされるものである。清代には姚観元が陸心源旧蔵写本・阮元旧蔵写本・葉鞠裳旧蔵写本を校合して印行したもの(姚観元刊本)が広く通行した(朱・胡 2020)。陸心源旧蔵写本は現在静嘉堂文庫に伝わる¹¹。

前述のように復古編の宋刊本は伝わらず、影宋写本とされるものは元刊本より誤りが多いことから、元代の校訂・増補本が用いたのが宋刊本と元刊本のどちらなのかは興味ある問題である。續復古編はその序文に「起於至順三季秋八月、成於至正十二季閏三月」とある。1332年に始まり、成書は20年後の1352年ということになり、開始時点では元刊本は未だ印行されていなかった筈である。したがって、当初の基盤は宋刊本あるいは(元代の)何らかの影宋写本であった可能性がある。残念ながら續復古編は復古編にあった序文などを含まないため、簡易に判断する材料が無い。

2.3. 増修復古編・續復古編の評価

四庫全書提要では増修復古編について「其濫者如全字之類。引及道書。又蕪雜而不盡確。所分六書。尤多舛誤。如殷字爲國名。孫字爲人姓。……」と厳しく批判する。その影響か、續修四庫全書は四庫全書提要では言及しない續復古編は収めるが、増修復古編は収めない。胡 1937はこの2つについて「呉氏之書、頗不謹嚴。如全字之類、引及道書、則其取材極不可靠也。……曹氏之書、體例悉照張有、張書二千七百六十一字、曹書六千四十九字、其比張書爲擴大、

⁵ 李陽冰は説文の見出し小篆を現在一般的な玉箸体に改めたと言われていることから、懸針体を用いる唐写本説文解字残巻は李陽冰以前の状態と考えられている。小徐本の巻36 怯妄編、巻39 疑義編に本編で採らなかった小篆字形がいくつか見られる。南宋代に成立した『六書故』は「李陽冰廣説文」を少なくとも33箇所で引くが、主に字形の解釈についてであり、小篆そのものは必ずしも示されない。小徐本が示す李陽冰の字形も六書故には見えない場合が多い。

⁶ このうち1種は『説文解字五音韻譜』を刊行した虞仲房によるものと言われるが、虞仲房は序文も含め今日に伝わらない。

⁷ 野田 2013によれば『學古編』の最も古い印行の記録として知られるものも、やはり好古齋による印行であるという。

⁸ この他に『後復古編』『復古篆韻』『重類復古編』『復古編繆編』があった

という(邱 2011)。

⁹ 汪士鍾旧蔵明刊本(凡例・六義之図あり、序文なし)、繆荃孫跋明刊本(趙搗謙序・張美和序あり、凡例・六義之図なし)の画像が北京国家図書館の中華古籍資源庫で公開されている。この他、呉騫旧蔵写本の画像が台北国家図書館で公開されているが、これも上巻のみである(序文・凡例・六義之図なし)。汪士鍾本には汪啓淑の蔵書印があることから、四庫全書提要で参照している版本がこれであったことが判る。

¹⁰ 序文は2つとも年記が無いが、張美和序に『六書略』『偏傍小説』『韻釋』『字源正譌』『六書本義』の名前が見える。『六書本義』は洪武11年成立である。

¹¹ 入庫当初、前述のように「影元写本」と扱われていたが、後にそうではないという説が出たとの情報を静嘉堂文庫より頂いた。詳細調査中である。

……」と対比し、續復古編は復古編の拡張版と位置付けるが、増復古編は増補版とは見做さなかったようである。復古編・續復古編を主題とする先行研究は幾つかあるものの(尹 2008、朱・胡 2020)、増復古編を主題とするものは見当たらない状況も、このような評価が一般的であることを裏付けている。

しかし、増復古編で批判されている箇所を細かく見ると、呉均が創り出した妄説というわけではない。たとえば「艘」に関しては、「艘、船箸沙不行也。从舟叟聲。借: 三艘國名。亦同叟。俗作艘、非。」とするが、冒頭の「船箸沙不行也。从舟叟聲」は大徐本そのままであり、「如艘字爲國名」と批判される「借: 三艘國名」は廣韻の「艘: 書傳云三艘國名。」を引いたものであろう。また、「其濫者如全字之類。引及道書。」と批判される「全」についてはそもそも増復古編の本編の見出し字になっていない。「全」について道書を典拠とするのは廣韻が最初と思われる。これらは呉均の創作ではないし、説文の説解を廣韻で上書きしているのではない。増復古編に対する四庫全書提要の厳しい批判は再検討の余地があるだろう。

2.4. 本稿の課題設定

復古編と増復古編・續復古編の関係を議論するための予備的な調査として、本稿では増復古編・續復古編の小篆を抽出し、その文字集合を復古編のそれと比較することで近縁関係を考えたい。現存する増復古編は附録を全く欠いているので、比較可能な本編のみ対象とする。また、これらの元代の増補版が、現存しない宋本復古編の復元材料となる可能性についても考えたい。

3. 調査と結果

本稿では、復古編・増復古編・續復古編の本編の見出し小篆を ISO/IEC 10646 の CJK 統合漢字群に対応づけ、その重なりによって見出し字の共有数を計った。本稿の目的はあくまでもこの 3 資料の小篆字形を比較するための文字集合の重なりなので、小篆に対して最適な統合漢字を絞り込むことはせず、複数の対応可能なものを列挙する。また、これらは韻書構造であるため、多音字が数字含まれる。本稿では小篆に対し項目通番を振って指示する。本稿では対応付けは字形のみで判断し、反切や字音の違いは考えない。

3.1. 調査対象資料

3.1.1. 復古編

復古編に関しては、四部叢刊三編にて影印が流通している黄丕烈旧蔵影宋写本と、中華再造善本で影印が出版された好古齋元刊本を基本とする。この 2 種は序文に出入りがあるため¹²、別系統であると考えられる。邱 2011 では、好古齋元刊本は萬曆年間の黎民表明刊本の祖本であって、さ

らに明刊本から模写された四庫全書の祖本でもあると位置づけている。邱 2011 では明刊本を確認できてはいないが、四庫全書提要が明刊本について、影宋写本にある樓鑰の序文が無いと記すことからの推測と思われる。影宋写本にある王佐才序に関しては四庫全書提要では言及が無いが、王珏 2020 によれば、明刊本には王佐才序は彫られておらず、旧蔵者の馮龍官がこれを書き加えているという。

明刊本は影印出版などが無いので、本稿では四庫全書文淵閣・文津閣本と、陳寶晉旧蔵本(臺灣国家圖書館、索書号 110.2 00982)を用いた。これらは明刊本からの模写と思われる¹³。

3.1.2. 増復古編

増復古編に関しては、北京圖書館珍本叢刊の汪士鐘旧蔵明刊本の影印を用い、一部繆荃孫旧蔵本、また臺灣國家圖書館の清・吳騫旧蔵写本の画像で補った¹⁴。

3.1.3. 續復古編

續復古編に関しては、北京圖書館珍本叢刊の趙宦光旧蔵の写本(明写本)の影印と、姚覲元による思進齋清刊本(續修四庫全書所収)を用いる。趙宦光旧蔵写本では一箇所小篆の見出し字「泮」が脱落しているが、それ以外の見出し字の出入りは無い。ただし、字形の微細な違いがあり、翻刻では修正が加わっている可能性がある。

3.2. 結果

3.2.1. 文字集合の重なり

各資料の所収字数とその重なりについて表 1 に示す。

表 1: 復古編類の見出し字数とその重なり

資料	見出し字数 (本編)	多音 字数	復古編(元刊) 共通見出数	占
復古編(影宋)	1239	4 ¹⁵	1239	×
復古編(元刊)	1240	4		○
復古編(四庫)	1239	4 ¹⁶	1239	×
増復古編	明刊 1737 清写 1737	4	1021	○
續復古編	明写 2138 清刊 2139	47	179	×

復古編の影宋写本・元刊本・四庫全書は基本的に同じ文字集合が同じ順序で並ぶ¹⁷。

まず、復古編の影宋写本と元刊本の本編見出し字は図 4 に示す「占」の 1 字を除いて完全に対応する。前述のように邱 2011 では序文の状況から明刊本や四庫全書本は元刊本からの系列と考えたが、「占」を含まないことから影宋写本の系列と思われる。

¹² 影宋抄本には陳瓊の序文(北宋・大觀 4 年)、程俱の後序(北宋・政和 2 年)、王佐才の刻復古編序(南宋・紹興 13 年)、樓鑰の復古編新序(南宋・嘉定 3 年)がある。元刊本には陳瓊の序文はあるが、程俱の後序は書きつけられたもので、王佐才・樓鑰の序文は彫られていない。また、元刊本の程俱の後序の前には好古齋による年記と東湖精舎による跋がある(元・至正 6 年)。

¹³ 王 2020 は北京國家圖書館所蔵の明・馮舒写本(善本書號 3378)が明刊本から模写であるとする。陳寶晉旧蔵本には王 2020 が指摘する明刊本・馮舒写本特有の誤写が見えるので、明刊本からの模写と考えて良いであろう。また四庫全書は「此本爲明萬曆中黎民表所刊」と書かれている。

¹⁴ 汪士鐘本では上平声葉 14 が完全に脱葉し、去声葉 01 の右側も失われて

いる。これらの葉は繆荃孫本で補うことができる。版木の傷などから判断して汪士鐘本と繆荃孫本は同版と思われる。ただし、繆荃孫本は版心近くが破れていることが多く、それらについては吳騫写本で補った。

¹⁵ 邱 2011 では重出字を 4 字(p.272)、王 2020 では重出字を 3 字と数える(p.61)。

¹⁶ 四庫全書文津閣本は「思」の小篆を「忽」に誤るが、説解は「思」のままであるので、重出とは数えない。

¹⁷ 四庫全書の文淵閣本・文津閣本を比較すると、文津閣本は明刊本の上巻葉 25 と葉 26 が入れ替わって模写されたと思われる。

元刊本は「𡗗」を「𡗗、屏也。从土、占。別作店、非。」のように注する。大徐本の説解は「𡗗、屏也。从土、占聲。都念切。」であるのに対し、形声字について「聲」を略する復古編の形式に従っている。また「別作店、非。」に関しては大徐本からは得られないので、この項を後人が大徐本から採取して加えたものとするよりは、本来あったものと見るのが自然であろう¹⁸。

𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗
𡗗	𡗗	𡗗				

列を判断するのは危険である。

以上より、續復古編が影宋写本の系列であるのか、元刊本の系列であるのかを評価するには、より詳細な分析が必要である。

4. 小結

本稿では、復古編・増修復古編・續復古編の本編の小篆をデータベース化し、文字集合の重なりを確認した。

その結果、復古編と増修復古編は多くの重なりがあり、復古編の増補としての性格を確認できた。ただし増修復古編は元刊本に基づくと思われる。一方、續復古編は重なりが1割程度であり、殆ど別物であることが判った。この2つに関して、四庫全書提要などを引いた評価は再検討の余地があると言える。

また重なる部分の字形差について調査すると、増修復古編はある程度大徐本と異なる復古編特有の字形を残すのに対し、續復古編はより大徐本に近づけており、説文と別に復古編を参照する必要がある場合には適切ではないという結果を得た。

今後の課題としては、附録部分のデータベース化がある。現存の増修復古編は附録部分を失っているため、増修復古編・續復古編の2者の傾向を比較する材料とはならないが、復古編・續復古編の関係についての材料としては利用可能であろう。特に、復古編・續復古編の本編は文字集合の重なりが少ないため、より多くの小篆を収集する材料として検討すべきである。

謝辞

本研究は科研費課題番号 16K004600A, 19K12716 の成果を含みます。訪問による文献調査が困難な社会情勢下であり、邱永祺先生、陳永聡様、また北京國家圖書館、上海圖書館、臺灣國家圖書館、静嘉堂文庫、広島大学図書館の方々に多大なる御助力を頂きました。書道学分野での最近の研究動向に関して山本亮様、孫海橋様に貴重な情報を頂きました。深くお礼申し上げます。

参考文献

- 許慎:『説文解字』, 北京國家圖書館所藏南宋元修本影印, 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社, 2017, ISBN 9787501360253
- 許慎:『説文解字』, 淮南書局翻刻汲古閣四次様本, 京都大學人文科學研究所所蔵, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A024menu.html> (2021-06-13 閲覧)
- 李燾:『宋板重刊説文解字五音韻譜』, 中國書店, 2012, ISBN 9787514904192.
- 李燾:『重刊許氏説文解字五音韻譜』, 出版者不明(明・白口本), 國立公文書館 請求番号 278-0153, <https://www.digital.archives.go.jp/file/3610214.html> (2021-06-13 閲覧)
- 李燾:『重刊許氏説文解字五音韻譜』, 崇川陳大科白狼書社刊本(明・萬曆本), 京都大學人文科學研究所所蔵, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A023menu.html> (2021-06-13 閲覧)
- 張有:『復古編』, 黃丕烈旧蔵影宋写本, 四部叢刊三編
- 張有:『復古編』, 北京國家圖書館所蔵好古齋元刊本, 中華再造善本, 北京圖書館出版社, 2004, ISBN 7501325472.

張有:『復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明・馮舒写本, 善本書號 3378

張有:『復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・陳寶晉旧蔵本, 索書號 110.2 00982

吾丘衍:『學古編』, 早稻田大學所蔵 堺屋新兵衛刊本, 請求記号チ 06 00027, https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/chi06/chi06_00027/ (2021-06-13 閲覧)

張有・吳均:『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・繆荃孫跋本, 善本書號 7331²¹

張有・吳均:『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・汪士鐘旧蔵本, 善本書號 7332²², 北京圖書館古籍珍本叢刊 5 卷, ISBN 7501307032

張有・吳均:『増修復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・吳騫旧蔵写本, 登録號 rarecatx0223446

曹人:『續復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明・趙宦光旧蔵明写本, 善本書號 7978, 北京圖書館古籍珍本叢刊 5 卷, ISBN 7501307032

曹人:『續復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・阮元旧蔵写本, 登録號 rb0002212

曹人:『續復古編』, 北京國家圖書館所蔵 清・姚覲元校本, 善本書號 02128

曹人:『續復古編』, 清・姚覲元翻刻本, 續修四庫全書, 經部 23 7 冊, ISBN 7532524604

尹雙:『《續復古編》研究』, 浙江大學人文學院碩士論文, 2008

王珏:『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626

黃建榮:「王安石《字說》說解字義的特点和以“會意”說解字義的原因」, 撫州師專學報. 2001 (02), p.64-69.

胡樸安:『中国文字學史』, 商務印書館, 1937

朱生玉、胡惠:「曹本《續復古編》概説」, 寧波大學學報(人文科學版), 2020-03-10, Vol. 33, No. 2, p. 94-99.

鈴木俊哉、塚田雅樹:「五音韻譜の小篆字形のデータベース化と ISO/IEC 10646 小篆提案への適用分析」, 情処研報(DC), 2021-DC-120(13), p.1-7 (2021-03-19), <http://id.nii.ac.jp/1001/00210521/> (2021-06-13 閲覧)

陳侶佐:「宋代における「古文篆書」」, 書学書道史研究 2019(2), p.15-30,106-105, doi 10.11166/shogakushodoshi.2019.15

陳侶佐:「宋代における篆書発展の背景について」, 大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌 (17), 31-46, 2020-03-31, <http://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/53040/> (2021-06-13 閲覧)

邱永祺:『張有《復古編》総合研究』, 臺北市立教育大學碩士論文, 2011, <https://hdl.handle.net/11296/538zcm>²³

野田悟:「吾衍『學古編』の版本とその流伝考」, 高野山大學論叢 48 卷(2013-02), p.39-60, https://www.koyasan-u.ac.jp/library/paper/pdf/2013/ronso48_noda.pdf (2021-06-13 閲覧)

福田哲之:「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究 2003(13), p.43-53, doi 10.11166/shogakushodoshi1991.2003.43

²¹ 北京國家圖書館の中華古籍資源庫では 7331 と 7332 の画像が入れ替わっている(2021-01-04 当時)。電子資料閲覧の際には注意されたい。

²² 北京圖書館珍本叢刊の影印では、末葉の蔵書印を消しているため、汪啓淑の印が見えなくなっている。

²³ 古典文獻研究輯刊 第 16-17 冊(花木蘭文化出版社, 2018, ISBN 9789864853700)で出版されている模様だが、改訂部分の有無について本稿執筆時点では未確認である。